



特 253

992

金澤醫科大學教授 星野鐵男 著

養教育の眞髓

衛生文化パンフレット

第廿一―廿二輯

衛生文化思想普及會

始



特 253
992

は し が き

「愛児のために何を爲すか」を出してから、もう一年あまりになりました。その間に二三冊のパンフレットを出したと思ひ乍ら果すことが出来ませんでした。今茲にこの「養教育の眞髓」を出すことが出来るのは嬉しいことでもあります。

これは昨年の秋、文部省主催の「母の講座」がわが金澤医科大学に開かれました時に、七回にわたつて話しましたものを、出来る丈短かく書いたものであります。従つて充分に意を盡してゐないところがあります。今はこのまゝ送り出すことにします。

「養教育の眞髓」といふのであつて見れば、これでは内容が少し足りないと思考へになるであらうと思ひます。養育上の大問題は、子どもの榮養でありますし、教育上の大きな問題は、子どもの知育と職業への準備教育でありますから、この二大項目を缺いたのでは、ものになつてゐないといはれても仕方がないことになります。それは私にも解つてゐるのであります。この二つの問題に就いては、簡單乍ら、前のパンフレット「愛児のために何を爲すか」の中に書いて置きましたから略すことにした

のであります。

環境の問題はパンフレット第三輯「環境の浄化」の中に可也詳しく述べて置いたのでありますが、また少し違つた見方から書いてみたのであります。

「本能指導の教育」といふ問題に就いては、もつともつと詳しく組織的に書かなくてはならぬのであります。今回は唯概要文を湧ひて来るまゝに綴りました。「子どもの感情教育」といつたやうな題目で他日詳しく書いて見たいと思つてゐます。この點が輕視されてゐたために、今日の社會生活が如何に快くないものであるかは御解りでせう。朗かな、明るい感情生活を樂しめるためには、幼年期に於ける感情の教育と本能の指導とが、非常に大切なのであります。おさへつけられたり、ゆがめられたりした感情や本能は、必ずいつか都合のよくないものになつて顯はれて來ます。

「母の恐怖病」に就いても、もつと、もつと具體的に述べる方がよいと思ひましたが、ごく簡単にしか述べられませんでした。然しお母さん方が反省して下さるためには、これ丈でも充分であらうと存じます。大じにした子は弱いものです。貧乏時代の子どもの方が丈夫で、樂になつてからの子どもが弱いといふことは、常に耳にもし眼にもするところです。逆理のやうですが事實です。知識は健康と

幸福のもとであるにかゝはらず、半可通は却つて不健康を招くことになるのです。この點は眞劍に反省して頂き、矯正して頂きたいのであります。

家庭教育の問題が眞劍に考へられるやうになつて來た此頃のことです。これは小さい乍らに一文獻を加へたことになるのであります。著者の嬉しく思つてゐるところであります。何卒「愛兒のために何を爲すか」とあはせ讀まれて、愛兒の健康と幸福とを増進されんことを祈ります。

附 記

このパンフレットの出版費は、この事業に興味と好意とをよせられてゐる、A村のK様が御寄附下さいました。こゝに附記して、厚く感謝の意を表します。

昭和六年三月二十五日

著 者

目次

一、序論……………一

二、養教育の根本問題……………二

三、養教育の目標……………一〇

 獨立自治の人……………一四

 至誠奉公の人……………一六

四、日本の健康状態……………一八

五、環境の撰擇……………二八

 自然的環境……………二九

 1、温・湿度より見たる環境……………三〇

2、氣流・日照より見たる環境	三九
社會的環境	四七
1、人口より見たる環境	四八
2、健康施設より見たる環境	五〇
3、教育施設より見たる環境	五四
六、本能指導の養教育	五八
七、虚弱の原因として母の恐怖病	六九
不消化恐怖病	六九
感冒恐怖病	七一
八、結 論	七四

養教育の眞髓

星野 鐵 男 著

一、序 論

「養教育の眞髓」といふ演題の下に、數回に亘つて述べて見た。

茲に養教育といふのは、どういふ意味かといふに、身體の發育を順調ならしむる養育と、精神知能の發達を誘導する教育との兩者を指してゐるのであつて、主として家庭に於いてなさるべき養育と教育とを問題としてゐるのである。

「眞髓」といふのは、この養教育に就いて色々のことがあるが、その中心と見るべき、根本的なことは何であるかを指してゐるのである。

衛生學の專攻者である私が、「養教育の眞髓」などいふ大それた演題をかくけて講述するといふこ

とは、出すぎたことではないか。却つて危険なことにはなりはしないか。然し私は思ひきつて講述を試みることにしやう。といふのは、生來虚弱な私、種々雑多の病氣にやまされつゝ今日に及んで來た上に、虚弱な子どもの養教育に可也骨折つて來た關係から、この種の問題に就いては、讀みもし研究もし經驗もしてゐるので、發言する資格はあるものと思つてゐるからである。

衛生學の立場よりわが國の状態を眺めて、私は涙なきを得ないが、更に教育の上より眺めて、希望の光消える思ひを禁じ得ないものがあるのである。

養教育の問題は國を思ふ者のゆるがせに出來ぬことであつて、母たるものは、直接わが子の問題として、また自覺せる母は國の大切な大問題として一心に考へて見て貰いたいのである。

諸君が唯に個人的家庭的の立場からのみ問題を見ることなく、もつと廣く國の立場に立つて一國の將來といふことに考へ及んで頂きたいのである。

二、養教育の根本問題

養教育の主體となる兩親ことに母に、

「自分は養教育者である。」

といふ強い自覺がなければならぬことは、申すまでもないことである。

自分は日本婦人である、自分は母である、といふ自覺があるのとないとの間には、非常な差異がその生活の上に現はれて來る。本當のよい仕事といふものは、強い自覺の上に築かれて行くものである。

母は先づ何よりも先に、この養教育者たるの自覺をもたねばならぬ。

私は始めて父となつた時に思つた。

「今日から自分は人の父になつたのだ、一人の人が、その養教育の全體を自分に一任することになつたのだ。これは小さい出來事ではない。自分の肩は重くなつて來た。あらん限の力をつくし精神を傾け、方法を案じて養教育せねばならぬ」

と。そして二兒の父、三兒の父となるに従つて、この自覺は層一層と強くなるばかりであつた。

父たるの自覺といつたのでは充分でない。父としての養教育者たる自覺といつたならいゝかと思

ふ。同じやうに、唯母となつたといふ自覺ではなく、母としての養育者、母としての教育者といふ自覺である。

四

自覺するものは、自分を深く反省する筈である。自分には果して養育者たるの資格があるであろうか。充分なる資格をもつてゐるであろうか。養教育の目的をはつきり把握してゐるであろうか。養教育の方法について考へて見たであろうか。

わが子をどの様に育てやうといふのであるか、どんな風に育て、行けばよいのであるか。母は考へねばならぬ。いくら考へても考へ過ぎるといふことはない。手を下す前に、口を開く前に、内に深く反省し思考せねばならぬ。

○

養教育者としての自覺と立場とがきまつたならば、次に養教育の客體となる、子どもの研究に手をつけねばならぬ。

如何に強固なる自覺があつても、落付いた子どもの研究をぬいて、よい養教育はあり得ないのである。

わが子の研究をわすれては、問題は進行してゆかぬ。

わが子について研究することは、個別的な特種的な研究であるが、そのみではもとより足りない。子どもといふものゝ一般的研究、即ち子どもの身體の發達、子ども心理の發展を一般に記載してゐる書物について研究せねばならぬ。

子どもの體質といふものはどんなものであるか。子どもの性質は一般にどんなものであるか。育児の本や児童心理學書は、これ等の點に就いて教へて呉れるであろう。

然し母は個別的に、わが子について絶えざる觀察と研究とを重ねて行かねばならない。

わが子の體質はどうであろうか。胸腺淋巴性體質といふものではなからうか。滲出性體質の現はれを認めることがないか。或は神経質の子どもではないか。など、實際わが子について深い注意をもつて、その顔貌、その皮膚、筋肉、骨格、その抵抗力、消化状態等々を觀察せねばならぬ。

わが子に現はれてゐる體質と両親の體質との間には、何か關係はないか。母が滲出性體質であるとよく子にもそれが現はれる。母の皮膚が弱く、粘膜の抵抗力が弱いと、よく子どもの皮膚や粘膜も病氣にかゝり易い傾向をもつてゐることがあるのである。

五

兩親は自分達の體質に就いて深く考慮し、その子の體質について研究する必要がある。

次にわが子の性質はどうであるか。

情性の子であるか、知性の子であるか。大ざつぱではあるが、この二種に就いて考へた丈でも大なる利益がある。

意志の弱い情のかつた子どもの養教育は可也困難なものである。道義心の缺乏してゐる傾向があるといふことが早く解つたなら、そのつもりでその子の訓育を考案せねばならぬ。勉強せよといはなくとも、しきりと勉強するやうな子と、いくらいつても外遊びに夢中して、簡単な宿題さへしやうとしない子との性状は全く違つてゐるのである。好奇本能の強い子と弱い子とがある。やりばなしの性質ときつちり整理することを好む性質とがある。思索型の子もあれば、行動型の子も生れて来る。同一の兩親から生れるのではあるが、數ある子ども達の性質は皆違つてゐるのが普通である。

養教育者たるものは、その子達の性状に應じて指導せねばならぬことは明かである。

次にわが子の天分はどうであるか。

天賦の才がどういふ方向に現はれて来るであろうかは、親の天分を知つた丈ではもとより分るもの

ではない。然し天賦の才といふものは主として兩親より、また祖父母達より遺傳して来るものであるから、養教育者たるものは、自分達の才能に就いて、また親戚の人々がもつてゐる天分について觀察して置かねばならぬ。そして生れて來たわが子の上にどんな天賦の才が現はれて來るかを研究する筈である。わが子の天分を早く見出すことは、母の重要なつとめの一つである。

大きくわけていふならば、理科的の傾向が強いか、文科的の傾向が主であるか。理科的であつても算術のよく出来る子と博物などの成績のよい子との別があることは、周圍に多く見る通りである。文科的といふても、表現に巧みなものと拙なるものがある。藝術的天分ではあつても、色彩を以てすることに巧みなものと、音の表現に巧みなものとある。

何れにせよ、わが子の天分が何であるかを出来る丈早く見出して、それをのばしてやることは養教育者の最も大切な仕事といはねばならぬ。

○

健康な體質をもつて生れて來た子どもは、益々健康に成長せしめねばならぬ筈であるし、虚弱な遺傳をもつてゐる子ども達は、よりよい環境と愛護によつて、健康な發育を遂げるやうに、導かねば

ならぬ。

八

弱い子どもを育てることは、並み大抵のことではない。私は虚弱な早産児を二人も育て、来たが、その骨折りは随分大變であつた。よく育つたものだと思ふ程であつた。

身體丈健康なら、それでいふものではなく、その知能が順當に發達して呉れねば親の心配は大したものである。學業成績の悪い子は恐らく一生涯親の心配の種となるであろう。知能も技倆も平均以上であれかしと、凡ての親は願ふのである。

以上の二つがよく行けばそれで事足るかといふに、そうではない。子ども達の品性が然るべき方向に陶冶されて呉れねばならぬのである。凡ての親達は、子どもの躰け問題で頭を悩ますのである。

子どもの虚言で困らぬ親はなからう。反抗心の強い子どもにはホト／＼困りぬいてる親が相當にある。我儘な子どもも少なからずある。盗みを覺えた子について悩んでゐる親も相當にある。

身體に、知能に、品性に。あゝ親となつては心の休まるひまもなく、その養教育のために心勞するのである。何の困難も心配も骨折もせずして、子どもの養教育を完成した人もあるが、それは極めて少數であろう。

育て難い子をもつた親の心は曇り勝ちである。困つて仕舞ふ、泣いても足りない、あきらめきれぬといふ場合が少なくなす。

子どもの人格が完成する迄、獨立自活の一人前となるまで、親は骨折る、心勞する、悩む。

然しこれが人生の姿である。

私は養教育の根本精神をこゝに置く。

子どもの人格を完成しやうと骨折りつゝ、兩親自身の人格が人間としての最高階段へ向つて完成することを喜びとするところにあるとする。

養教育は子どものためのみではない。國のためのみではない。養教育をするところの、父と母とが自らを、體驗を通し研究を通して、磨いて行くのである。

育て、育てられる、教へて教へられる。この根本的なものを理解し、把握して、養教育に従事すべきであると、私は思つてゐる。

九

三、養教育の目標

養教育にあたるものゝ覺悟用意に就いて述べたから、次にはその目標、理想に就いて申上げることにする。

子どもの性狀に應じ天分に應じて、伸び得る方向へ伸びられる丈伸ばしてやるのが、養教育者のなすべきことであるならば、目標などを立て、餘りに人爲的になるのは、本來なすべきことではない、なるやうになれといふのが本當ではないか、といふかも知れない。そういふところにも一理はある。親がその子の天分に關係なく決定した仕事を、子どもに強いるといふことが、非常に多く見られるが、それがよくないことは勿論である。文科に行きたいといふ子に、そして確かにそういふ天分のある子に、親が醫師なるが故に無理に醫科をやらせるといふことがある。金儲けなどいふことに何等の興味なく、藝術的天分豊かな子どもを強いて商人にしゃうと骨折る親がある。繪などかいてゐては生活が出来ぬ、商賣に限ると親は思ふに違ひない。

私達の周圍を靜かに注意して見るならば、かゝる見當違いの目標をたて、それにあふ様に、子どもを養教育してゐるものがあるが、それが大なる誤りであり、そうしたのでは、本當に子どもは幸福な生活を送ることは出来ないものである、といふことを、時経てから知るであらう。茲に私がいふところの「目標」といふのは、そういふことではない。如何なる人でも、人である限り、如何なる職業にしようが、何處の世界に行こうが、昔も今も、東でも西でも、たてゝ以て養教育の目標とすることが出来るといふ様な、人間としての目標をいふのである。私は簡潔に述べることにしよう。

一言にしていふならば、既に古くからいはれたところの

「健全なる精神と健全なる身體」

といふことである。

然らば「健全なる精神」とはどんな精神であるか。東洋古來の理想であつた、智仁勇を備へた状態のことであるか。

しかり、確かに智仁勇の三徳を備へた人は健全なる精神の所有者といふことが出来る。

智者になりたいと思はないものはない。唯學校へ這入つた、卒業した、學士になつた、博士になつ

たといふ丈では、智者とはいへない。わが子を本當に智慧のある智者に育てあげたいものである。中江藤樹先生の母はそういふ考をもつてゐた。恵心僧都の母もそういふ目標をたてゝゐた。

眞の智を備へさせたいものである。

それと共にわが子を仁者に育て上げたいとは思はないか。仁を行ふところの人としたい。孔夫子は仁を説いて一生を過した。仁を身に行ひ、仁を政治に行はしめんとして諸王を説いた。今の世には望んでも出来ない相談かも知れないが、いや出来ないことはない、どうしても實行して貰はねばならぬのは、仁政を行ふことである。言葉は古いが、仁の精神に則つた政治が行はねばならない。大多數のためになる政治は即ち仁政である。

わが子を本當に仁の人即ち愛に燃えてゐる人に育てあげたいと願はないか。そんな大きな望はもつたつて駄目だから、もちませんといふか。私はいひたい。ウィリアム・クラーク先生と共にいひたい。

“Be ambitious!” “大望を懐け!”と。

全き愛は怖れをのぞく

といふ。確かに本當の仁者ならば、その衷心に於いて勇者であるに違いない。然し勇者たる行動をい

つもするものではない。

勇者たり得る素質ある子を、本當の勇者となすために、両親は力めねばならぬ。

本當の勇あるものは、人の顔を怖れない。ウォルムスの大會議に呼び出されたルッターは大なる勇者たることを示した。彼は多數の權威ある人の顔を怖れなかつた。

眞の勇者は世界中が反對して總立ちになつても、自ら眞理として奉じてゐる主義を曲げず、一人毅然として立つ人である。

歐洲大戦時に於けるラムゼー・マクドナルドは確かにこの種の勇者であつた。

「わが子よ、本當の勇者になつてくれ！」

と母は願はないか。

木村重成の如きは、確かに智仁勇兼備の士であつた。

○

東洋古來の教育理想は、「智仁勇」であつた。これを具現した人格者であつた。

目標は高いところに置く方がよい。遠いところにおく方がよい。

「よろしく高遠なる理想をもて」といふべきである。

然し、ねらつてねらいあてられる程度のところに的を置かなければ、的を射あてることがは難かしい。それ故、親として、養教育の目標を定めるのに、實際、實行可能な程度にして、而かも高遠なるものと牴觸しないところに、その目標を見定める方がよい。

「健全なる精神」といふ目標の内容を、私は次のやうな、私の言葉としてあげることにしやう。

獨立自治の人

私はわが子を如何にもして、「獨立自治の人」に育てあげたいと思つてゐる。

現代社會は益々有機的な關係の密となつて來てゐる社會である。獨りで好きなやうに振舞ふといふことは出来ない。デモクラシーの世の中である。

然し本當のデモクラシーは獨立精神と反對ではない。寧ろ本當の獨立精神、自治精神を基礎としてそこに結成される協調であり、聯盟である。

獨立心の減少し來てゐること現代の如きはない、とはいひ得ないか。若者をとらへてきいて見るがよい。「如何に不遇な地位にあるも、腕一本をもつて、やつて行きます」とはつきり曰ひ得る青年は多いであらうか。

親に頼り、親戚に頼り、教師に頼り、上官に頼り、政府に頼り、金權に頼る。

依頼心の強いこと夥しいものである。

依頼の精神つよいものは、必ず他によつて支配せられ治められる。他に支配せらるゝ者は屈辱の歴史をとどめる外、何をもなすことはあるまい。

後世までも裨益する底の人は、必ず獨立自治自律の人であつた。

わが子を獨立精神旺盛のものに育てる親こそ、本當に子を愛する者である。

空の鳥を見よ、野の獸を見よ、皆獨立自治の生活をしてゐるではないか。

野の獸によつて、空の鳥によつて、わが子を教へよ。自ら額に汗して食ふことの貴きこと、寄生生活の恥すべきことを教へねばならぬ。

至誠奉公の人

人の世話にはならぬ、人には迷惑はかけぬ、どんなに貧乏でもどんなに苦しくとも、一人でやつて行く。獨立自治でやり通すといふ人は、幸な人である。羨まれていゝ人である。かういふ人ばかりの世の中になれば、問題は非常に少なくなる。厄介な社會問題なんか極めて減少してくるに違いない。然しいくら獨立獨行の人が多くなればとて、社會に病人が全く絶えることはあるまい。貧乏人が絶無になるといふこともあるまい。どんなによい理想社會が實現したとしても、天賦の才能を皆同一にするといふことは出来ぬから、個人差といふものは永久にのこり、それから来る生活の差異といふものは起り得るのである。

それ故缺乏してゐるものを補ひ、困つてゐるものを助け、悩んでゐるものゝ相談相手となり、慰め勵まし力づけ、希望を與へる等の奉仕の仕事は、いつの時代にも必要である。

至誠——天地を貫く眞心、人の本心を構成する筈の至誠を以て、他のために盡そうといふ精神を、わが子に養成してやることは、両親の重大な務めではないか。

一方に於いては人の世話にはならぬといふ獨立の精神、それでゐて、人のためには出来る丈の奉仕をしやうといふ精神、この精神を子どもに連れてやりたいのである。

この二大精神を、養教育の目標にすることはどうであろう。私は漠然と抽象的に理想を掲げるのでなしに、日々の生活に於いて、獨立自治の心を培ひ、社會との接觸に於いて、奉仕の精神を養つて行くことを、人格教育の目標として、毫も誤らぬと思つてゐる。

獨立精神が少ないにも勝りて、奉仕の精神は缺けてゐるといふことが出来る。

依○頼○的○利○己○主○義○が横行調歩してゐる現代である。それがために、諸々の問題が、發生してゐるではないか。

依○頼○的○利○己○主○義○に換ゆるに、獨○立○的○奉○仕○主○義○を以つてしたらばどうであろうか。世は如何に住みよ
い所となるであろう。

それがためには、親たるものが、先づこの心になつて、養教育の目標を、そこに置き、之を實現しやうと努力するのぞなければならぬ。

四、日本の健康状態

養教育の根本精神が確立し、養教育の目標が明瞭となつたならば、既にその仕事の三分の一は出来たものといつてもいゝのである。

問題を進めて各論にすることにしやう。

○

わが國の健康状態はどうであるかを、第一に明かにして置きたい。

一國一社會の健康状態を知るためには、その罹病率と死亡率とを明かにせねばならぬ。

罹病の統計は未だ全国的に明かに研究されてゐないが、死亡統計は殆んど完全になつてゐるから、これによつて、わが國の健康状態を知るのである。

今次に、明治十九年以來、毎五ヶ年平均の死亡率が、どう變化して來たかを、歐洲の數ヶ國のそれと比較して掲げてみることにしやう。

		一八六一—一八九〇	一八九一—一九〇〇	一九〇一—一九一〇	一九一六—一九三〇	一九三二—一九三五
日	本	二〇・六	二〇・七	二〇・九	二三・六	二二・九
獨	逸	二四・四	二二・二	一七・五	一九・〇	一三・三
英	國	一八・九	一七・七	一四・七	一四・五	一二・二
和	蘭	二〇・五	一七・二	一四・四	一三・七	一〇・四

これで明かである通り、わが國現今の死亡率は、明治二十年前後の死亡率よりも高いのであつて、換言すれば、四十年前の時代よりも、今日の方が健康状態は面白くないのである。日本は長足の進歩をした、醫學は非常に進歩したといふのに、死亡率で推察せられる健康状態は、決してよろしくなつてはゐないのである。

獨逸の死亡率はどうであるかといふに、四十年前は、わが國のそれよりも遙かに高いものであつたが、年と共に低下して、近年では人口千に付一三・三(一九二二—一九二五)となつてゐるのであつて、死亡率の低下状態からみると、健康状態は年と共に面目を改めたといふことが出来るのである。英國も同様であるといへる。

和蘭の如きは、四十年前には、その死亡率わが國のそれと等しいものであつたが、逐年減退して、一九二二—一九二五の平均では僅かに、一〇・四となり、わが國の二二・九に比しては、半ばにも足りないものであつて、羨まじき限りである。

以上は一般死亡率に就てであるが、乳兒の死亡率を同様に比較して見ることにしやう。數字は生産百についての死亡數を示してゐる。

	一八六一—一八九〇	一八九一—一九〇〇	一九〇一—一九一〇	一九一六—一九二〇	一九二一—一九二五
日 本	一一・七	一五・三	一五・七	一七・四	一五・九
獨 逸	二〇・八	二〇・一	一七・四	一四・五	一二・二
英 國	一四・五	一五・六	一一・七	九・一	七・六
和 蘭	一七・五	一五・一	一一・四	八・四	六・〇

注意してこの數字を見て頂きたいのである。わが國の乳兒死亡率は、一九一六—一九二〇の一七・四を頂點として逐年増して來てゐるのに、他の國々は、綺麗に、年を追ふて減少してゐるではないか。和蘭の六・〇とわが國の一五・九と比較しては、いやになつて仕舞ふではないか。小兒科學が進歩し

たといひ、その研究業績の發表は年と共に多くなつたといつて喜んでゐるにもかゝはらず、赤ん坊の死亡は皮肉にも減少せずに、却つて増加してゐるのである。

どうしてかうなつて來たのであるかを私は茲に述べないが、兎に角、一般死亡率に見るも、乳兒の死亡率に見るも、わが國現在の健康状態が、以前と比較して見て、また他の國のそれと比較して見て、決して愉快を感じないものであるといふことを、確かに知つて置かねばならぬことを、茲にはつきり申し置きたいのである。

○

次に注意せねばならぬことは、一ヶ年百二十萬餘の死亡者を出す、わが國の健康状態ではあるが、どういふ病氣のために、かくも多くの者が、たはれるのであるかといふこと、即ち死亡の主要原因は何であるかといふことを、明かにする必要があることである。

一萬以上の死亡者を出す、主要死亡原因二十一と、その各々の死亡實數及び比例數を、次にあげることにしやう。

主要死亡原因 内地 最近五ヶ年(自大正十三年至昭和三年)平均

死因名	死亡實數	總死亡千中	人口千=付
一 總	一、二一五、四九六・〇	一、〇〇〇・〇〇	二〇〇・七
二 下痢及腸炎	一四六、二四六・二	一二〇・三二	二・四二
三 肺炎及氣管枝肺炎	一二一、二七七・〇	九九・七八	二・〇一
四 腸出血 腸軟化	一〇〇、三二〇・〇	八二・五三	一・六六
五 畸形先天性弱質乳兒 =固有ナル疾患	八三、二九四・六	六八・五三	一・三八
六 肺結核	八二、五三三・二	六七・九〇	一・三六
七 老衰	七二、七一・八	五九・八二	一・二〇
八 腎臟炎	六〇、九一九・八	五〇・一二	一・〇〇
九 腦膜炎	五八、五一四・六	四八・一四	〇・九七
一〇 心臟ノ器質的疾患	四一、三八六・四	三四・〇五	〇・六八
一一 外因死	三七、六三五・四	三〇・九六	〇・六二
一二 胃ノ疾患	二六、七〇七・〇	二一・九七	〇・四四
一三 腸及腹膜ノ結核	二四、〇六八・六	一九・八〇	〇・四〇
一四 腹膜炎(産ニ因スルモノヲ除ク)	二二、九九二・二	一八・九二	〇・三八
一五 急性的氣管枝炎	一九、八八二・二	一六・三六	〇・三三

一五 急性的氣管枝炎	一七、九五二・四	一四・七七	〇・三〇
一六 肋膜炎	一六、二七一・八	一三・三九	〇・二六
一七 慢性氣管枝炎	一五、五七五・二	一二・八一	〇・二六
一八 脚氣	一五、〇八九・〇	一二・四一	〇・二五
一九 麻疹	一二、五〇五・六	一〇・二九	〇・二一
二〇 自殺	一二、三七四・二	一〇・一八	〇・二一
二一 腸チフス	一〇、一〇〇・四	八・三一	〇・一六

(内閣統計局編纂、自大正十三年至昭和三年、日本帝國人口動態統計ヨリ算出)

下痢及腸炎だとか、肺炎及氣管支肺炎だとか、先天性弱質だとか、麻疹だとかいふ病氣は、主として乳幼児を襲ふものであり、肺結核とか、腸及腹膜の結核とか、腹膜炎とか、脚氣、自殺、腸チフスとかいふ病氣は主として、青年男女を冒すものである。

五歳未満の乳幼児は抵抗力が弱いから、以上のやうな病氣のために左右されることが多いのであつて、總死亡の約三割八分を占めてゐるのである。實數でいつて見ると、大正十三年から昭和三年に至る五ヶ年の平均では、四十五萬八千四百餘が死亡してゐるのである。

十五歳から三十歳までの青年はどれ程死亡するかといへば、やはりこの五ヶ年の平均で、男六萬五

千五百七十九名、女七萬四千八百九十四名である。

妻としてまた母として最も能率よく働き得る、三十歳から四十五歳までのものは、年々、五萬餘も死亡し、同年齡の男は四萬六千八百餘り死亡するのである。

次にうるさいやうではあるが、大變に重要であるから、年齡階級別に死亡状態をあげる事にしやう。

年齡階級別死亡

(自大正十三年
至昭和三年
五ヶ年平均)

總數	死亡實數		各性死亡千中	
	男	女	男	女
〇—四歳	六二五、〇二八・六	五九〇、四五四・〇	一〇〇〇・〇	一〇〇〇・〇
五—一四	二四一、三九四・〇	二一七、〇三四・四	三八六・二	三六七・六
一五—二四	二五、四九八・四	三〇、〇四四・二	四〇・八	五〇・九
二五—三四	四七、二七七・八	五四、一七五・四	七五・六	九一・八
三五—四四	三二、八四三・二	三七、八二四・〇	五二・六	六四・一
	三二、二八〇・二	三二、九六〇・〇	五一・七	五五・八

この表を丁寧に注意して見て頂きたいのである。四十五歳以上のものは略して載せてはゐないが、男女別に數字の表す意味を探り乍ら、この數字を見ると、痛ましいことがわかるのである。

乳幼児の死亡が如何に多いかは既に述べた。五—一四歳即ち幼稚園小學校年齡のものは最も死亡すること少ないのであるが、次の年齡階級である一五—二四歳は非常に多いのである。而かも五歳以上何れの階級をも通じて、女の死亡が男の死亡より多いのはあるが、特にこの一五—二四歳の女子青年に於いて、それが最も強く甚だしく現はれてゐるのである。

乳幼児の死亡が多い

青年の死亡が多い

ことに青年女子の死亡が多い

といふことが、進んでゐる外國と比べて、わが國の困つてゐる特徴なのである。

わが國の健康状態は、どうしてかう悪いのであろうか。

進歩したといはれてゐる醫學は、本當に進歩してゐるのであろうか。表面的にそう見える丈で、し

んまで進歩してゐるのではないのではなからうか。

學としての醫學は進歩してゐるのであるかも知れないが、術としての醫學がその適度よろしきを得てゐないのかも知れない。進歩した醫學をいつも正直に應用してゐるものは、大學病院か公私立の大病院か、特に熱心な開業醫師丈ではないか。國民の大多數は日進月歩の醫學の應用の圏外にゐるのではなからうか。

茲に醫學教育、醫事行政の大きな問題があるのであるが、私は、そこへは、深入りしないことにしやう。

醫學も進歩してゐるとし、醫學の應用もよくいつてゐるとし、即ち醫師の側には何等の落度がないとして、それで病人は増すことなく、死者は少なくなるものであろうか。どんなに名醫がゐて、その冴えてゐる腕を振ふとしても、病人の懐に金がなかつたらどうであらう。今日の世の中は、特に金のないものには都合悪く出来てゐるのである。

貧乏では醫者にもかゝれないではないか。結核のことを無産者病といつてゐる位ではないか。

「うまい物を出来る丈食べるやうにして、安靜にしてゐなければいけない」と醫師にいはれた、ある

ルンペンプロレタリアートがいつたといふことである。

「その日の食物にさへ困つてゐる俺に、仕事をやめて、うまい物を食ふやうにしろつて？、醫者といふものはお芽出度いものだナ。」

國民の大多數は確かに、進んだ醫學の要求するやうな、靜養法を守るには都合の悪い經濟状態にゐるのである。

貧乏なるが故に、健康的な家には住めないし、よい榮養は取れないし、それ故病氣にかゝり易く、かゝればろく／＼治療も出来ないものである。

貧乏なるが故に、知識も少なく、實に知識を得る機會も少なく、育児法も知らず、結核の養生法にも疎いといふ譯である。

私は、ある貧しい人々のこと丈をいふのではない。

全般的に日本といふ貧乏な國のことをいふのである。デンマークに比べて、ニュージーランドに比べて、一等國だといはれてゐる日本が、どれ程見劣りのする經濟状態にあることであらう。

もつとよい健康状態にするには、今の醫療組織を改革せねばならないであらう。豫防行政をもつと

徹底せしめねばならないであろう。國民一般の衛生思想を、もつとく程度の高いものに、せねばならないであろう。

然しそれ丈では足りないのである。社會の一般が、もつと樂な暮しの出来るやうに、ならねば駄目である。分配がもつと具合よく行かねば駄目である。

あゝ貧と病弱の國日本！

思へば涙なきを得ないではないか。

心ある人々は考へて貰いたい。

どうして日本をもつと富ますか。どうしてももつと具合よく富を分配するか。どうしてももつと浪費のない生活を実現するか。心ある人々は眞剣で考へねばならぬ。

五、環境の撰擇

養教育を考へるものが、深い注意を拂はねばならぬことの一つは、「環境」といふことである。

身體の養護といふ點から考へて見て、如何に環境といふことが大切かはすぐにわかることである。

教育上、環境から來るところの影響の大なることを、知らぬものはあるまい。

それ故、養教育に適する環境を撰擇することは、非常に大切であつて、養教育者たるものゝゆるがせに出來ぬ問題である。

主として衛生學の見地から環境を論ずることにしやう。

自然的環境

われ／＼を取り巻いてゐる環境を大きく別けると二つになる。一つは自然であり、他は社會である。然しわれ／＼が、或る時は自然に住み、或る時は社會に生活するといふのではない。われ／＼の生活してゐるところは、いつも自然のうちにある社會であつて、それ以外のところに生きることはないのであるから、「自然と社會」といふやうに別けて考へることは、實際に於いては無理であるが、考へてみる上からは、説明する上からは、二つに別ける方が便利なのであるから、今この分類によつて話をすゝめることにしやう。

私達が村や町をつくつて住んでゐるところは、或は山、或は野、或は海邊であつて、部分的に見る

と、そのところによつて非常に違つてゐるのであるが、相近いところは、山野か海邊かによつても、そう著しくは違はないのである。然るに少し遠方になると、或は大山脈を隔てゝゐる南と北では、或は表と裏では、非常な違いを呈してゐるのである。

私は環境といふものを、空中現象の上から見ながら述べてゆくことにしやう。

1 温・湿度より見たる環境

地球上に生きとし生けるものゝ生命の源である太陽は、一瞬時と雖もその輝やきを消すことはないが、地上の有様によつて、或はその光熱の受け方に違いがあり、或は光熱を遮る水蒸氣の多少によつて晴曇雪雨、様々の違いを現はすことになるのである。

ある地方は熱暑に苦しめられてゐるといふのに、他のある地方は寒氣酷烈に悩んでゐるといふのである。

ある地方は日々晴朗、氣持よい溫暖の冬を健やかに楽しんでゐるのに、同じ日本であり乍ら、而もそう遠く離れてゐるといふのでもないにかゝはらず、ある地方は暗く寒く濡けて陰鬱不健康な日々を暮さねばならぬといふのである。平等々々といつても、時間に即し空間に就いて考へて見れば、全き

平等などいふものはないのである。ある狭い範囲内に於ては同一の温度も湿度もあろうけれど、また人力の届く範囲ではその實現も可能であれど、大きく考へると、環境はその温湿度を異にしてゐること夥しいのである。

先づ温度の點から考へて見やう。

赤道附近熱帯地方が如何にあついかは、経験しない者でも知つてゐるであらう。この氣温が高いといふこと丈で、衣食住の凡てが變はり、文化が變つてゐることは驚くばかりである。世界地圖を開いて貰いませう。そして熱帯圏内にある國々は何々であるかを復習して貰いませうか。

人の國のことはあとにして、先づわが國の南の方を見ることにしやう。蕃族の問題から、その存在が私達の頭に最近更に確かとなつた臺灣の中央部にある嘉義といふ町から南の方は、熱帯圏に這入つてゐるのである。臺南も高雄も恒春も、皆熱帯の町であるのである。

フィリッピンや東印度諸島は勿論、佛領印度支那も、シヤムもビルマも印度の大部分も、皆熱帯に屬してゐるのである。

太平洋上と春の國ハワイが、やはりその圏内にあることを見落してはいけない。

更に東の方新大陸で見ると、熱帯に數へられる國々は、中央アメリカの全部と西印度諸島と南アメリカの大部分である。

熱帯に關する氣象と地理の知識なくては、日本の南方發展は不成功である。日本は既に縦に長い國ではあるが、更に縦に南方にのびて行くべき運命あるものと、私は思つてゐる。

私達は蟹の性ではない、蟹のやうに横ばいして、支那やカリフォルニアに行かうとすると、厄介な問題を起すのであるから、樹上の猿が樹から下りるやうに、一度赤道附近まで下つていつて、それから先は、横にでも縦にでも、發展する方がいゝのではないか。

「涼しいところ、温かいところ」とばかりいはずに、熱い／＼地方の存在を確かに知つて、子等や孫達を、その方面へ發展させることを、充分に考へて貰いたいものである。

○

世界の文化人の大部分は、温帯地方に住んでゐるのであるが、一口に温帯といつてもその範圍は實に廣く、年平均溫度、零度から二〇度までのところをいふのである。

温帯圏の北方に位しても、英國のやうに都合よく温かい國もあれば、その南方にあつても、印度の高原地方の如く、寒い國もあるのである。同じ温帯内で、而も同じ日本で南と北では大變な違いである。臺中や臺北と樺太の豊原や敷香とは大違いである。臺中の昭和三年の平均溫度は二二・四度であるが、敷香のそれは〇・八度である。溫度の上から見れば、臺中も臺北も、熱帯に數へられることになるのである。

そんなに南北相離れたところを考へず、もつと近いところを比べて見てもよい。

東海道の沼津と、飛驒の高山とはそう離れてはゐないが、兩方の溫度は可也に違つてゐること次の如くである。

一月の差異は大變なものである。沼津が六・〇度といふのに、高山は零下二・五度といふのである。どれ丈の範圍を氣温が動いてゐるかは、これ丈では解らないから、毎日の最高平均と最低平均とを見やう。

昭和三十九年	昭和三十三年				昭和三十九年
	一月	四月	七月	十月	
昭和三十九年	一月	四月	七月	十月	昭和三十九年
平均	平均	平均	平均	平均	平均
一五・三	一五・六	六・〇	一三・七	一七・八	一五・三
九・九	一〇・二	零下二・五	八・一	二二・四	九・九
				一二・六	

毎日最高ノ平均 沼津 高山

昭和三十九年	昭和三十三年				昭和三十九年
	一月	四月	七月	十月	
昭和三十九年	一月	四月	七月	十月	昭和三十九年
平均	平均	平均	平均	平均	平均
二〇・三	二〇・四	一三・九	一八・九	二二・五	二〇・三
一六・二	一六・四	二・九	一五・九	二八・二	一六・二
				一八・五	

毎日最低ノ平均 沼津 高山

昭和三十九年	昭和三十三年				昭和三十九年
	一月	四月	七月	十月	
昭和三十九年	一月	四月 <td>七月</td> <td>十月</td> <td>昭和三十九年</td>	七月	十月	昭和三十九年
平均	平均	平均	平均	平均	平均
一〇・九	一一・三	一・四	八・六	二一・五	一〇・九
五・一	五・四	零下七・一	一・七	一八・五	五・一
				八・三	

沼津では、一月に最高の平均一四度程に温度が高くなるのに、高山では、三度位までしか上らず、高山で、最低温度が零下七度にも下るに、沼津では、一度半位でとまつてゐるといふ譯である。直線にしたら三十里程しか離れてゐないのであるが、海や山の關係から、かくも氣温に大きな違いが來るのである。

もつと近いところでいへば、例へば一つの町でも日を受けてゐる丘の南と、日陰になつてゐるその北とでは、必ず可也の違いがあるのである。更に同じ家のうちでも、南向の室と北向の室の日中温度

には大變な差を生ずることを知らぬものはない筈である。
 位地により状況によつて、環境温度を非常に異にするものであるといふことを、明瞭に知つて置かなければならぬ。

○

次には湿度のことを述べやう。

わが國が最も多濕の國であるといふことは、今更申す必要もない程、よく知れてゐることである。

累年平均	昭和三年			
	一月	四月	七月	十月
東京	七四・二%	七五・七	六七・二	八一・六
新潟	七九・二%	七五・五	八一・三	七六・三

海岸に近い程濕氣は多く、遠い程少くなるのが常則ではあるが、唯海との關係のみでは説明は出来ない場合が多い。

太平洋に向いてゐる地方は、夏から秋にかけて湿度は高く、日本海に面してゐる地方は秋から冬にわたつて濕け

るのである。

東京と新潟との湿度を比べて見れば明かである。

年の平均湿度が、七〇%以下となるといふところは、わが國に於いては殆んどないといつていゝ。大連や朝鮮になると、七〇%以下となつてゐるところが可也にある。

海岸地方は一般に濕氣多く、内陸地方はそう湿度は大でないといふのが通常であるが、土地の状況では、そうでないところがあることもよりである。前にもあげた、飛驒の高山を例にとつて見れば

累年平均	昭和三年			
	一月	四月	七月	十月
沼津	七三・六	六六・五	七二・七	七八・三
高山	八〇・三	八五・九	八二・〇	八四・四
前橋	七二・八	五九・四	六五・一	八一・五

解るから、前と同じ様に、沼津と共に比べて見やう。尙ほそれに、群馬の前橋を併記して、内陸の濕氣状況を見られるやうにしやう。

同じく内陸地方には變りはないが、高山と前橋とは大變な違いである。高山に於いては一月が最も湿度大である

に、前橋では最も小である。

關東地方の冬は一般に乾燥するのであつて、ストーヴでも用ひるところでは、どうして室内濕氣を適度にしやうかと、一工夫を要する程である。

溫度と關聯して濕度の問題は、健康上、生活上非常に重大な意味をもつてゐるものである。

濕氣が大であるからこそ、わが國の氣溫は極めて徐々に變はるのであつて、それが衣服の種類を複雑にしたり、たんすや物入を色々にしたり、書畫美術品の手入れを困難にするのである。

濕けるといふことが健康上非常に悪いといふことは申すまでもないことである。濕ける地方が悪いといふ丈ではない。どんなに乾く地方でも、低濕の地が悪いのは明かである。乾いてる町でも村でも他の事情のために、その住居が濕けることは可也多く見ることであるが、それが悪いのはいふまでもないことである。

○

養育の上から見て、その環境を撰擇する標準は、「濕けない」といふことが第一である。「夏は涼しく冬は温かく」といふことが第二である。然しそういう具合に丁度よいところがある譯ではない。たとへ

あつたとしても、私達は遊牧の民の様に都合のよいところへと、居を移すことは出来ないのであるから、生れついたところを、私達の生活に都合のよいやうに、即ち濕けないで、涼しく、温かく住めるやうにすることを工夫せねばならぬのである。今日の状態はどうであらうか。

氣象上の知識の缺けてゐる一般は、以上述べたやうなことは知らず、各自の住居状態に對しても反省を缺いてゐるのである。

愛兒を育てる上からいつても、溫濕度に關する環境知識の缺乏が、如何にその子を弱めたり、病氣のなほりを、おくれさしてゐるか知れないといふことを、解らずにゐる者の多いのは、情けないことである。

2 氣流・日照より見たる環境

溫度濕度に關係して大切な他の一つは氣流といふことである。空氣の動き即ち風の問題である。溫度がのぼり、濕度が高まつて來ると、風なしには居られぬ程、風の存在が思はれて來るのである。むしろあつい日本の夏に於いて、特にそうであることはいふまでもない。

それは夏に限つたことではない。室内の溫度と濕度が高まつて來るときは、いつでも氣流を欲する

のだ。こみ合つてゐる冬の汽車にのつたものは知つてゐやう。人いきれのする、あつところから外に出たら、どんなにいゝ氣持がするか知れないであろう。劇場や映畫館などでも同様である。人のゐるところには、絶えず空氣が動いてゐる必要があるのだ。殊に新鮮な空氣が絶えず少しづつ這入つて來て、汚染された空氣と交換することが大切なのだ。

眼に見え、肌を感じなくとも、氣流はあり得るのであるから、氣流の全くないといふところはない譯であるが、それが、室内の上昇した濕潤度を、常に低下させる程度に、存在してくれなくては困るのである。

新鮮な空氣が絶えず流れ入るならば申分ないが、そこにある空氣をたゞ動かす丈でも、意味があるのである。夏私達が扇を用ふるのは、全くそれではないか。扇風器の使用も同様である。之等のものは唯空氣をかき廻す丈であつて、必ずしも新鮮な外氣を室に導いてゐる譯ではないが、扇風器のあるのとないのとの間には、可也の差があることは、誰でも知つてゐやう。

空氣が動いて居ない時は、私達の身體の表面にある空氣の溫度と濕度とは、離れてゐる周圍の空氣のそれよりも上昇してゐるから、氣持がよくないのである。それを扇なり扇風器なりでかきまわして

體表面の上昇濕潤度の封筒を破つてくれ、周圍の空氣に觸れさしてくるので、いゝ氣持になるのである。

濕けない夏の地方にはこの必要はない。體から出る水蒸氣は、出るに従つて蒸發して仕舞つて、上昇濕潤度封筒が特別につくられてはゐないから、風を起してそれを打破る必要がないのである。

健康地といはれるところには、絶えず心地よい微風が吹いてゐるのである。夏の山地や海岸がそれであることは明かである。

○

愛兒達を心身爽快に育てやうと思ふ者は、その子の居るところの空氣が絶えず動いてゐるやうにしてやらねばならぬ。

絶えず動けばいゝといつても、隙風が絶えずあつて、眠つてゐる子どもの體温をはげしく脱却するやうではいけないのは申すまでもないことである。

子ども達の眠るところ、遊ぶところ、飲食するところの換氣法には、細心の注意を拂ふべきである。氣流といふことは健康上非常に大切ではあるが、唯空氣が動きさえすればよいのではなく、それが

どの方向から動いてくるか、どれ程の速さをもつて動いてゐるかが、次に問題になるのである。

寒い冬に、シベリヤの方から冷えきつた風が、するどい速力で、吹き込んで来ては、たまらないのであるし、あつい夏に、南の海から濕つてゐる風が暑熱をもつて来ては困るのである。

それ故私達の村や町が、都合のよい位置に、都合のよい方向に、出来あがつてゐてくれれば、申分ないのであるが、實際上さういふ風に出来てゐるのは少ないのであるから、私達が氣流の方向と速度といふことを頭において、家を借りたり造つたりするときに、夏は涼しい風を充分いれるように、冬は冷たい風を防ぐようになつてゐる家を、探したり或は建てたりする筈である。

今次に金澤で観測された、風の方向をあげて見ることにしよう。

大正十三年から昭和三年までの五ヶ年平均で、夏と冬とにどの方向から風が吹いてゐたかと申すと六、七、八の三ヶ月の観測回数二二二〇回のうち、東寄りの風、即ち東、北東、東北東、東南東、南東等の風は八九五回になつてゐるから、三八・七%となる。南及西寄りの風、即ち南、南南西、南西、西南西、西等が、五九九回、即ち二五・九%となつてゐるのである。それ故、夏は東の方の風が多く次いで西南の方の風がこれに次ぐといふことになる。

然るに、冬になると反對で、観測回数二二三五回のうち、東寄りには八六〇回、三八・五%、西南寄りには九三一回、四一・七%となつてゐるのである。冬には西や南の方から吹いてくる、雨や雪をもつてくる風の方が多いことになるのである。しかも西南方向の風は、その速度が大であるから、家の間取についていつて見ると、西のあいてる家では、冬は寒さをひどく感ずることになるのである。

東のふさがつてゐる家が、夏はあつてゐることは明かである。

家を借りるにしても、下宿の室を探すにしても、以上のことを知つてゐて、夏は涼しく冬は温かいやうなものを見つけないと、住んでから、困ることは健康上ばかりではなく、經濟上にもあるのである。むしあつければ、物は腐れ易いし、冷たいものを多く飲みたくなるし、寒風の強く這入る家では炭が餘計にいるし、薬代もいることであろう。

健康にとつて、生活にとつて、氣流の問題は實に大切であることを、はつきり知つて頂きたいのである。

○

次には日照のことを考へて見よう。

太陽が照らしてゐる時間を観測して、一ケ年に照らし得る時間を百とした時、実際に照した時間数がその何%になるかを示すのが、日照時である。満天雲なく、或はあつても少なく、全く曇つてゐる時の二割以下の雲しかないといふのを快晴として、一ケ年間快晴日数はどれ程あるかといふことを見る。

本日表					本日裏					日照時	快晴日数
岡	名	濱	沼	東	境	福	金	高	新		
山	古	屋	松	津	井	澤	田	湯			
五 六 〇	五 一 〇	五 四 〇	五 一 〇	四 七 八	四 三 二	四 二 二	四 二 〇	四 一 六	四 二 八	四二・八%	二七・六日
四 八 八	六 四 〇	七 〇 八	五 五 〇	五 六 八	二 八 二	二 八 〇	二 九 四	二 五 四			

この二點から各地方の状態を見るに、可也の相違があるのである。裏日本と表日本との有様を、昭和三年以前の五ヶ年平均数字で表にしてみると上のやうになるのである。

この表で一目瞭然であろう。表日本に比して、裏日本は、日照時も快晴日数も、遙かに少ないのである。殊に後者はその半ばにもならぬのである。

光の有難味が本當にわかるものは、裏日本に、光を慕ひつゝ、濕つぽく、暗く生きねばならぬ北陸人であろう。私はこの數年、本當に「光が慕はしい」としみじみ感じたのである。なぜ光が少ないのであるか。曇るからである。雨が降るからである。雪が降るからである。

それならば、雨や雪のふる日数は裏表日本でどう違うであろうか。またその分量はどれ程であろうか。これも表にしてみることしよう（累年平均）。

本日表					本日裏					降水日数	降水量
岡	名	濱	沼	東	境	福	金	高	新		
山	古	屋	松	津	井	澤	田	湯			
一 二 七	一 四 三	一 四 〇	一 五 〇	一 四 六	二 〇 五	二 一 九	二 二 二	二 三 一	二 二 五	二二・五日	一七九六・三耗
一 一 三	一 六 八	一 九 四	一 九 九	一 五 六	一 九 四	二 四 一	二 五 三	二 八 八	二 七 九	二二・三耗	二八八二・三

裏日本には、光が少ない丈それ丈、降水日数が多く、降水量も多いのである。世界に名高い雪の名所、高田の降水量が三千耗に近いことは知つてゐていゝことである。昭和二年には、三六五六・四耗となつてゐるのである。

光が少なくて、雨や雪の多いといふことは、健康の上にも經濟生活の上にも、その影響大なるものがあるのである。かゝる環境に生活するように運命づけられてゐる者は、泣言いつたとて仕方がないから、自然の恵少ないところを人力で補ふ工夫をして、健康を障害せぬよう、經濟生活も具合よくならうようにすべきである。

愛兒のために撰擇すべき環境として、光の多いところを第一に考へねばならぬのではあるが、光が多くとも、それを巧みに利用せねば何にもならぬのである。光の多い濱松をたづねて見たが、醜い町をつくり、暗い家をつくつては、光の多いことも、そのよい影響を及ぼすこと少ないのである。

よいにつけ悪いにつけ、自然そのままは、私達の生活にとつて、それ程問題にはならぬのである。自然を如何に利用するか。人力を自然にどういふ風に加へて行くかといふところに、即ち自然の中に人間社會をどの様につくつて行くかといふところに、問題があるのである。

海と山の國日本を、社會的に見て住みよいところにするものは、お互日本人のなすべきつとめであるのである。海の悪い影響を蒙らないように、山の悪い影響を防ぐように、人工の粹を集めて、村をつくり、町をつくり、家を建てる筈なのである。

問題はおのづから自然的環境のことから移つて、社會的環境へと向つたから、項をあらためて述べることにしよう。

社會的環境

子どもを養教育するものが、自然的環境について種々なることを知らねばならぬことは、以上申述べた通りであるが、更にそれにも増して重要なことは、社會的環境について細密に注意することである。前にも申した通り、私達の生活するところは、自然のうちにつくられた社會であるからである。村であり町であり、中都市であり大都市である。

自然の氣象現象がいつも私達の生に好適でないにも増して、社會狀況は私達の健康に、私達の經濟に好適にはなつてゐないのである。

文明は進んだといふ、學術は大に進展したといふ、それでゐて、何處に、その進んだ學術や文化を具象化した、理想的な、健康で明るく氣持よい、都市や村があるだろうか。

アメリカのワシントン市やイギリスのレッチウオース市は、近世科學の粹をあつめて、野原の眞中に計画的につくつたのであるから、都市としては最も明るい最も死亡率の低い、そして最も美しい都市をなしてはゐるが、その他の大多數の都市は、何等の計劃もなく、大きくなるに任せて、無方針無定見な、自治體當局の無關心のもとに擴がる丈擴がらせ、込みあへる丈込みあはせて、不健康、不美非教育的な都市にして仕まつたのである。

私達は村をつくり直さねばならぬ。町をつくりかへねばならぬ。今のまゝで満足してはいけない。

1 人口より見たる環境

一口に社會的環境といつても、それは實に色々である。自然的環境が多種多様であつたように、社會的環境もその種類極めて多いことは申すまでもない。こゝには人口の上より見たところを申述べてみよう。

私達が理想的な環境をつくつて行く上には、人口數といふものが大切な役目をもつてゐる。多過ぎ

ることはよくないし、少なすぎてもよくないのである。

最も少ないのは村であり、最も多いのは所謂大都市である。ロンドンやニューヨークのように七百萬だ、六百萬だといふように馬鹿大きい都市もあるし、僅かに數軒しかないといふ村もあるのであるが、その何れも理想的ではないのである。

どれ程の人口が、そんならばいゝだらうか。近世都市研究者の間に於いては、經濟的によく獨立してゆけ、衛生上の設備も出來、教育機關もあるといふためには、五六萬の人口がよからうといふのである。然し凡ての都市が皆その位のものにならねばならぬといふのではない。わが太陽系のように、中央には太陽に相當するところの大きな都市があり、その周圍には遊星に相當するところの、少しづつゝ大きさを異にする都市があり、遊星のめぐりにある衛星にもあたる、村が中都會の周圍にあるといふ具合になるならば、そしてこれ等の間に、交通上・經濟上・教育上・政治上の有機的關係があるならば、それが願はしい状態なのである。

日本の村は小さすぎて、近世の生活には、もう適してゐなくなつたと私は考へる。幾つかの村が一つになつて、村といつても、その有様は町と同様にならねばならぬと考へる。

私は數年前に「環境の淨化」といふ本を書いた。その中に、農村の都市化といふことを述べておいた。農村がもつと都市化して來なくては、近世の社會生活は營めないのである。日本の村で醫師の居ないところが非常に多い。醫師も居ず、齒科醫も居らず、産婆もゐないといふのでは困るではないか。日常品の供給も充分には、いつてゐない。娛樂機關もない。こゝろいふ有様は何に原因するかといへば、村の人口が少ないためである。村といふものはこゝろいふものである、これでいふのであると人は考へてゐるかもしれない。然し私はこれではいけない、村といふものを町のようにつくらねばならぬと考へてゐるのである。それには、醫師も齒科醫も産婆も店舗も出來て、充分生活出來るようにされる程度の人口がなければならぬと思ふのである。唯に人口さへあればいゝのではない。その人口が一ヶ處に集められて來ねばならぬのである。仕事は困難ではあるが、日本の農村を本當に住心地のよいところとするためには、どうしてもこゝろいふ考のもとに、つくりかへてゆかねば駄目である。申述べたいことはまだ澤山にあるが、別の機會にゆづることにしよう。

2 健康施設より見たる環境

村にしても町にしても、日本の社會的環境は健康的になつてゐない。もつと健康に適するもの

にせねばならぬのである。

近代的の健康都市といはれるためには、水道の設備がなくてはならぬのであるが、水道のない都市はまだ多くある。金澤のような、百萬石城下を誇つて來たところさへ、やつと昨年から給水し始めたのであつて、まだ全市に渡つては給水されてゐないのである。農村の飲料水が如何に悪いかは、一度農村を見たものが等しく口にするところである。井戸を用いてはいけないといふのではない。良水と與へるなら井戸水でも差支えはないが、危険のない井戸がどれ程あるか。大正十三年の夏金澤全市の井戸を調べたのによると、一六、四三九個の井戸中、良水を出してゐるものは、六七・九%であつたから、五千二百餘りの井戸は不良水を出してゐるのであつて、市民はそれを飲んでゐるのである。津幡町や羽咋町の井戸は半分以上が不良であつたのである。文明は進んだといふ、醫學は進歩したといふ、それでゐて、腸チフスが絶えず存在し、時々大流行を見るといふのは、どういふものであろうか。上水道が出來て、純良な危険のない水を使用することが出來るようにならなければ、急性消化器傳染病は終息しないといふことをはつきり知つて貰いたい。

次には下水道のことを述べねばならぬ。よい水の供給が出来ても、汚水の排泄がうまくゆかなくては、環境は浄化されないのである。小さな下水溝が塞がつてゐたり、下水管が破かいされてゐて、下水が井戸水の中へ這入つたりするようでは、傳染病の危険はまぬかれないではないか。下水道の設けはあるとしても、それが地下に埋没されてゐないで、用水の形をとつて露出してゐるために、無知な市民は之を洗たくに使用してゐるようでは困るではないか。おむつや便器を洗つてゐる下の方で、食器や野菜を洗つてゐるのを見るに至つては、何と情けないことであろう。完全とまでゆかなくとも、この位なら我まん出来るといふ程度の下水道は是非つくらねばならぬのであるが、市の當局や市會議員さん達は、ちつとも考へてはくれないのであろうか。

便所の問題は解決出来てゐるだろうか。どこの家へいつても便所の臭みのない家はないといふ程、日本の便所は悪臭の供給度が強いのである。ある西洋人が、「日本の町はどうしてこう糞臭いのであるう」といつて、よく注意してみると、市内の便所が自由自在に悪臭を發してゐるのを發見したといふではないか。悪臭に慣れきつて、家も町も糞便の臭いがするのを平氣でゐるとは、一等國の名にも恥かしいことではないだろうか。病院へいつても、學校へいつても、デパートでも劇場でも、便臭のし

ないところは少ないではないか。醜くつて臭くつて、寄生蟲病のもとをなして、傳染病の危険を伴つてゐる、日本の便所はどうしても改良されねばならぬのであるが、さて之を根本的に改良するためには、下水道と上水道とが先づ出来なければ駄目であることを知らねばならぬ。

健康に適する環境をつくり出すためには、都市の空氣をいつも清淨に保つことを考へねばならぬ。煤煙で空が暗くなるようではいけないし、交通機關が疾走すると、濛々と塵埃が立ち上るようでもいけないしするのである。街路は舗装され、街路樹は町をかざり、煙突は監督されるようにならねばならぬのである。

更に進んで町内に公園が設けられねばならぬ。將來の都市は田園化されねばならぬといふことを、私は拙著「環境の浄化」のうちに述べておいたのである。スポーツ獎勵の現代に於て、よく出来てゐる運動場やプールや體育館が市内好都合のところにあるであろうか。私達はこの方面のことにも自ら頭を用ひねばならぬ。他力本願ではいけない。皆自分達の力で解決つて行かなくてはならぬ問題なのである。

健康都市といはれるためには、以上のような健康施設があるばかりでは、もとより足りない、病人が氣持よく療養出来るような、経済的な療養所や病院がなければならぬ。個人經營のもとに出来たものでも悪いことはないが、氣持のよい個人經營のものは、必ず経済的ではあり得ない缺點をまぬかれない。経済的の心配なくして、入院療養の出来る者は少ないであらう。幾度も入院したところのある私は、その度に支拂の心配をせねばならなかつたので、この感が一層深い。一日二圓位で氣持よく療養出来ないものであろうか。多数の力でそう出来るようにせねばならぬと考へてゐる。

よい病院は設備が必要である外に、親切な健康相談所がなければならぬ。病氣になつてからでは間に會はない。健康を損いさぬうちからその指導をしてくれる親切な機關は非常に必要である。抵抗力の弱い乳幼児の健康指導は特に必要である。妊産婦の指導も大に必要である。母や母となるべき婦人達の特別な教育機關(母の學校)は是非設けられなければならぬ。

これ等の施設のある環境を私達はつくり出したいものである。細かい點に就いて述べねばならぬ點は尙ほあるが、餘白がないからこの位にして置こう。

3 教育施設より見たる環境

私達の子ども等を健康な環境に住まはせたいと思ふと同時に、是非教育的な環境で教育したいと思ふのは、親として極めて自然なまた當然な希望である。

それ故教育施設について少し考へて見たいと思ふ。村には小學校があるほか何の教育施設もないのは申すまでもない。町となつて始めて、幼稚園と中等學校とが出来る。都市となつて高等専門學校や學校以外の施設が加はるのが普通であり、中等學校も種類が多くなり、幼稚園の如きも設備がよくなる。

然し私が教育施設といふのは、幼稚園や小中大の學校のみをさしてゐるのではない。學校教育を徹底させるために、是非設けねばならぬところの圖書館、植物園、動物園、水族館、科學博物館等のことといふのである。

近年幼稚園が盛になつて來たのは嬉しいことであるが、私が非常に残念に思つてゐる點は、幼稚園といつてゐるにも拘らず、庭園を有たぬ幼稚園のあることである。幼児にとつて非常に必要なものは自然である。私は拙著「愛兒のために何を爲すか」の中にこの事を詳しく書いておいた。子ども達にとつては、自然程必要なものはない。それなのに狭くらしい家の中で遊ばせる丈で、砂原もなく、池も

なく、花も咲かず、蟬もなかない幼稚園とは、名のみで實のないものといはねばならぬ。

小學校内にある幼稚園でもそうである。庭はあるが、唯廣い空地といふにとどまるではないか。一般はこのところに注意を向けねばなるまい。

大都市といはれてゐるにも拘はらず、小動物園、小植物園さへないではないか。學校で、ひからびた標本のみでもつて、教育されるのでは満足出来ないのが、子どもの天性である。動物にしても、植物にしても、生きてゐるところを、その天然の有様に従つて見せたいのが、本當の親、本當の教師の心であり、そういふ施設をしてやりたいのが、本當の政治家である。

金澤を教育都市にするといふ聲がする。誠に結構なことである。然し何を指して教育といふのであるか。學校の數丈多くなれば、それでよいのであるか。それでは學校都市であつても、教育都市ではあり得ない。本當によい自然味豊かな幼稚園や小學校に、教育といふことを本當に理解してゐる教師方と父母達とが、心を合せて、子ども達を養教育するならば、そして學校丈では不充分なところを、科學博物館や魚類館や、前記の動植物園等で補つて、自然と人事に關する生きた知識を與へる教育が出來てこそ、眞の教育都市となるのではないか。

縣立圖書館がある。市立圖書館がある。結構なことである。然しそれ丈では足りない。子ども達をもつと圖書に親しめるようにしてやるために、小圖書館を各學校に設けねばならぬ。

○

教育的に見て、なくてはならぬものはなくて、あつてはならぬものがあるのが、現在の都市の状態ではないか。

私達はぼんやりしてゐることは出来ない。なすべきことを非常に多くもつてゐる。私達の子どもを本當に教育しようと思ふならば、現在の環境を、もつと教育的なものに、つくつて行かねばならぬのである。

勿論環境さへよくなれば教育が徹底するのではない。然し社會的環境を養教育の立場から考へてみると、是非之等の事は頭にもつてゐて貰いたいのである。

「環境の撰擇」は非常に長くなつてしまつた。まだ述べたいことは可也であるが、この位にして次の問題に移ることにしやう。

六、本能指導の養教育

子どもの養教育に就いて、最も大切なことは、前にも申した通り、子どもその者の研究である。個別的な研究と一般的研究である。外界が如何によく整へられ、教材が如何によく準備されても、子どもの研究が出来てゐなくては、養教育は出来ないこといふまでもない。

一般にいへば、子どもの心理研究といふことになるが、今茲に私が述べようとするのは、子どもの本能のことである。われ等の養教育に於いて、どんな種類の本能が、どんな役を演ずるか、私達はそれをどう指導すればよいか等のことを考へてみたいのである。

幼少年時代にあらはれて来る本能には實に色々のものがある。誰でもがすぐ氣のつくのは、四五歳の子どもが事々に人まねするところの、模倣本能である。父のまねをする。母のまねをする。出いりの商人のまねをする。兄か姉のある子ならば、兄姉のまねをする。それは唯形のまねである。その事がその子にとつて必要だから、そうするのではない。近くに居る人の行動や言葉をそのまま再現するのであつて、それには模倣そのもの以外には意味はないのである。實例をあげる必要もない程、皆日

々見てゐるところであるが、模倣そのものが、子どもの精神の發達に、筋骨の發育に、どれ程大切であるかを、充分承知してゐて、子どもの模倣本能を本當の意味に於いて指導してゐるであろうか。

模倣はいつまでも模倣であるのではない。いつかはそれが獨創の材料となるものであるから、子どもの眞似を禁じたり叱つたりしてはいけない。『嫌な子だね、この子は、人の眞似ばかりしてゐる』といふような言葉を母の口から大きくことがあるが、そういつてはいけないのである。眞似をするが中々上手には出来ぬものがあるから、それが上手になるように寧ろ練習してやる方がよい、電車の車掌のまねをしよう。玄米ばん屋のまねをしよう。支那手品師のまねをしよう。いつまでも同じことをまねてゐるものではないから、まねる間は、それが眞にせまるまでにまねさせるがよいのである。

模倣してゐる間に、手先の練習が出来るのである。表情の筋肉が發達するのである。言葉がたくみになるのである。

注意せねばならぬことは、どんな眞似でもさしていゝのではないといふことである。見習つてよいものもある。悪いものもある。長い間面白からぬものを眞似るのは勿論よくないのである。然しいつ

までも、子どもが同じことを模倣してはゐないといふことも、知つてゐていゝのである。孟母はどう考へたか知らないが、いつまでも孟子はお葬式のまねをしてはゐなかつたであらう。よい教育的環境へ移ることが非常に大切ではあるが、寺の近くにゐるから、子どもは僧侶になり、または葬儀執行人に成長するであろうと考へる必要はないのである。子どもの將來を決定するものは、深くうちにある内的なものである場合の方が多い。一時あることをしきりに真似をするから、そういふものに成長するかといふに、そうではない。軍人の真似をする数多い子ども達のうちの、極めて少しの者が軍人になるのである。

これ等の事を知つてゐて、而かも子どもの精神の動きに絶えず注意しつゝ、模倣本能を指導して欲しいのである。

○

模倣本能の表現と殆んど同時に、或は少しおくれで、好奇本能が現はれて來るのである。それからどうした、それからどうしたと、親を困らせる程に、子どもは追究する本能をもつてゐる。事のよつて來る理を究めたいのである。原因より原因へとさかのぼつて、根掘りはほりきかないでは置かないのである。

のである。

この好奇本能を巧みに指導するには、母は知識をもつてゐなければならぬ。いゝ加減な返事でごまかしてしまつてはいけない。わからないことはわからないと答へるがよい。知らないことは明かに知らないと答へるがよい。言葉を左右にしたり、にこしたりすることはよくない。好奇本能を巧みに指導してやるならば、その子のもつ天分に從つて、必ずその子は相當のところまで、抜き出たものになるであらうといつてもいひ過ぎにはなるまい。

なぜ夜になると暗くなるのであるか。

暗くなるとなぜ電燈がつくのであるか。

なぜ雪が降るのであるか。

雪はなぜ白いものであるか。

どうして風が吹くのであるか。

子どもの提出する澤山の質問に、一々、適當に、答へてやれる母にならねばならぬ。

小さな哲學者は、原因の原因のそのまた原因は何か何か何かと、大人を困らせること限りもなく追

窮するのであるが、この好奇本能あればこそ、人間は人間なのである。

これは究知の本能である。これが文化をつくつてゆくのである。科学文明を起し、哲學藝術の文化をさかんならしむるのである。

子どもの質問には眞面目に答へねばならぬ。大人の問には答へなくともいゝものが澤山あるが、子どもの質問にはどうしても答へる義務がある。問に對して問を以てすることも必要だ。究理の本能を刺戟して、自然を観察せしめ、社會人事を観察せしめる必要がある。

好奇本能のよき指導者たらんことに力めて頂きたい。

○

子どもにして遊ばない子どもといふものはない。「遊びは子どもの天職である」と私は自著のうちに書いておいた。三四歳の頃から遊戯本能は非常に強く現はれる。幼稚園とは、この子どもの遊戯本能を合理的に指導するところに外ならない。活動また活動、變化また變化の子どもの遊戯を巧みに指導することの出来る母は、本當に偉い母であるといはれていゝ。無心で遊ぶ子ども、いや、全精神を集中してゐればこそ、他の一切の事には無關心である子どもの、熱中する遊戯を、本當に指導すること

を學ばねばならぬ。

遊戯に於いて、子どもは身體と精神のよりよい發達を圖るように、自然は命じてゐるのである。

成人の立場から見れば、それは時に醜い、拙い、野蠻的な遊ではあるが、粗野な未開な状態から、洗練された進化したものへと進んで來るのであるから、どんな珍妙な遊びであつても、子どもの心のうつゝたものと思つて、よくそれを指導することを忘れてはならぬ。

遊びたい心は子どもにのみ個有ではない。一生涯を通じて、遊戯本能は消滅はしない。何等かの形に於いて、この本能は表現されてゐるのである。遊戯本能の指導はそれ故、非常に重要なものである。

○

蒐集本能も五六歳の頃から現はれる。何でもかまわずに集めさへすればよいといふ様に集めるものがある。子どもの手に落ちるものは何でもしまつて置くのである。或は少し組織だつて來て、似たもの丈を集め出すものがある。マッチ箱のレットルを集めたり、郵便切手を集めたり、電車の切符を集めたり、新聞の標題を集めたり、人形を集めたり。

一時期丈現はれて、もうその表現を見ないこともあるが、指導者がその本能を巧みに指導して、興

味をそゝりつゝ組織を興へつゝ蒐集せしむるならば、それは學者になる素質を培養することになる。家の子どもは新聞名を蒐めてゐる。まだ極めて拙いやり方ではあるが、それでも既に百二三十何種かを得てゐるのである。植物を蒐集して標本をつくり、蝶のあらゆる種類を集めて標本をつくるといふようなところまで指導して行くことが出来れば、非常な成功といふことが出来る。

唯蒐集する文では足りない。必ずそれを整理するように指導してやらねばならぬ。蒐集されたものは分類されて始めて意義が発生するのである。子どもには分類といふことは難かしい。色々の標準から、分類をして見せて、分類に対する興味を喚起するならば、知識慾を非常に刺戟することになるであらう。

蒐集されるものが何であつてもよい譯ではあるが、出来る丈蒐集される價值あるもの、蒐集そのものから、色々の他の知識を得ることの出来るようなものがいゝと思ふ。集めるに事をかいて、洋食屋のナイフやフォークを集めるために、レストランやカフェーに行くたびに、失敬して来るものがあるが、之等は蒐集本能が犯罪化したもので、恐るべき事といはねばならぬ。ドイツの子ども達がよく郵便切手を集めてゐるが、之などはよいことと思ふ。世界中の國々に關し、その地理その歴史に就い

ての知識を得させることになるのであり、根氣よく努力するならば、面白く蒐めることが出来るのであつて、分類も可也進んだ知的仕事となるのである。

本能を科學的に指導することが、一般に行はれてもいゝ時代となつてゐる筈であるから、わけでもない蒐集本能の指導には、父も母も注意を向けて欲しいものである。

○

人間は社交的動物であるといふが、子どもには早くから社交本能が現はれる。求友本能といつてもいゝかと思ふ。獨りでのみ遊ぶ子も例外としてはあるが、子どもの本性は、友だちをつくつて遊ぶものである。どんなに喧嘩をするようなことがあつても、そして親がその友だちとの遊びを禁じたとしても、いつの間にかまたその子と遊んでゐるのである。子どもから友達を奪ふといふことは出来ない。獨りでのみ遊び暮す子があるとすれば、それは非常に賢い子か、或は非常に愚かな子であらう。母や家の者を遊び相手とするから、外に友だちをもたぬといふことはあるが、普通には友だちなしには居られないのである。社交本能の然らしむるところであり、この社交によつて、子どもの性格は鍛鍊されるのである。兄弟姉妹もなく家にはかりゐて、友達とも遊ばず、幼稚園にも行かぬといふような

子は、多くは利己的な性格をもつようになるものである。あまりよくない子だと思はれる子どもと遊ぶことでも、社交本能を全くのばしてやらぬよりはいゝと私は考へる。社交本能を巧みに指導してやるならば、社会はもつとく住みよいところとなる筈である。

母は子どもの社交を尊重してやらねばならぬ。彼等の交友を眞に愉快なものに育てゝやらねばならぬ。社交の下手な日本人は、子ども時代に伸び得る筈の社交性、社交法をのばし學ぶことをしなかつたためではないか。

本當にいゝ友だちといふものは、つくつてやろうと思つても、中々出来るものではないが、さりとて手をつかねて、子どもに任して置くのも考へものである。幾人かの子どもの中絶えず行來をしていゝ友達を一人二人は母が決めてやり、温かい氣持で、友達との友誼を成長せしめるように、する方がいゝのである。美はしい友情程よいものがこの世にあらうか。よい友だちをもつといふことは、大なる財産をもつに勝ること萬々であるといふことを母は知らねばならぬ。實に勝る友だちをつくる機會を與へるように骨折つて貰いたいものである。

○

仲よく遊び社交を喜ぶ心があり乍ら、一方子どもの中には、鬭争本能が動き出して來るのである。

子どもはよく怒る、よく争ふ、よく喧嘩をするものである。この本能は男の子に於いて、殊にはつきり現はれる。現代のはげしい階級鬭争はこの本能の現はれであらうか。もとよりそう簡單にはいへないが、全く關係ないことはあるまい。

鬭争本能の指導よろしきを得ない社会は、物騒な社会である。鬭争や仇討を謳歌するような社会では、中々本當の平和、ことに國際的平和といふようなことは實現困難である。

この本能を指導するとはどういふのであるかといふに、全く鬭争を禁ずることではない。その本能から結果するであらうところの良い方面は、例へば勇氣、忍耐、同志愛といふようなものは、之を助長してやり、しかもそのよくない方面、憎悪、悪らつ、暴力等は之をのぞかねばならぬのである。これは困難な仕事に違いない。今日の國際平和を實現する丈の困難さが潜んでゐるといつてもいゝ位であるが、それは指導をしないでいゝといふ理由とはならない。

○

尙ほこの外にも色々の本能が現はれて來るが、一體これ等の本能といふものは、何のために現はれ

るのであろうか。

六八

それはいふまでもなく、個體の生命を保持するに必要な本能であり、また種族を維持するに必要な本能であり、社會をうまく結合させてゆくに必要な本能である。

生命をおとさないために直接必要な本能は、求食本能である。卵から出たばかりのヒナが、すぐ餌をあさつたり、生れてまもない動物がすぐ乳を探しあて、吸つたりするのは、まさに之である。のみならず生物は皆自分の生命を保つて行くに必要な食物を何に求めるかといふに、そう多くの食品には求めないで、數種のもので満足してゐるのである。彼等は榮養學を知らない。料理をしらない。而かも健康に飲食してゐるのはどうしてであるか。全く本能の命するところに従つて、やつてゐるからではないか。

種族を維持するに必要な本能としては、求愛本能と養護本能とをあげることが出来る。成長完成期に達すると、必ず愛を求め出すのである。種族をのこす相手を求めて、第二世をのこすのである。この本能を缺いてゐる生物はない。性の問題として今日やかましく論ぜられてゐるものも、要するに求愛本能の多面的な現はれに過ぎない。こゝに詳述することが出来ないことを残念に思ふ。拙著「性教育

に就て」を見られんことを望む。

養護本能といふのは、生れて來る子どもを育てる心が、幼少な子どものうちに形をとつて現はれて來るものをいふのである。人形を愛し弄ぶのは全くこれである。女の子に強く現はれるが、男の子にも現はれることがある。私の家の末の子は男であり乍ら、人形を負ふたり抱いたりすることを好む。養護本能の現はれであるから、ある程度までは男の子だとそれを禁する譯にはゆかぬのである。尙ほ／＼詳しく述べたいが紙數に限りあるから、この位でやめねばならぬ。

七、虚弱の原因としての母の恐怖病

子どもの面倒をよく見る人の子が非常に弱いことが屢々ある。放任してゐる人の子が丈夫である。これはどういふ譯であるか。私は色々観察してみ、考へてみて、こゝに二つの恐怖病が母をとらへてゐることを見出したのである。略述することにしよう。

不消化恐怖病

よく世話をする母が恐れることは、子どもの胃腸を悪くしはしないかといふことである。そこで少

六九

し變つたものは食べさせないようにする。食べつけてゐるものでも分量を過させないように、うるさく注意を與へる。「そうたべてはいけないよ、おなかをこはすから」とは、常にかゝる母の、いふことである。

かたいものはいけない、すじばつたものはいけない、なまのものはいけない、といふわけで、一般に不消化物といはれてゐるものを、よくないものと思つて與へず、滋養になるといはれてゐる、肉、魚、牛乳、卵等はしきりと食べさせようとする。

しかしそれが本當に子どもを育てる方法であらうか。私は反對に考へてゐる。

赤ん坊の間は流動食で育てる外はないが、離乳後は齒のはえるに従つて固形物を増してやり、便に注意しつゝ、時には不消化と思はれるものも、與へてみる方がいゝと思ふ。不消化物は、絶對的に不消化物といふ譯ではない。ある人にとつて消化し難いものも、ある他の人には消化し易いことがある。人間には不消化であるものが動物には唯一の食物で充分よく消化されてゐるのである。それ故常識的に不消化と思はれてゐるものが、皆誰にとつても不消化だと考へなくともいゝ。「なれる」といふことがある。消化し難いものでも食べなれると、ある程度には消化する。然し消化をしないで、不消化

物が一種の役目をもつてゐることを知らねばならぬ。植物性のせんゐは不消化性であるが、腸の運動を刺戟する役目をもつてゐるのである。

子どもは本能をもつてゐる。何でも與へて見るがよい。そして失敗したら、よくこの原因を調べてみるがよい。好き嫌ひをつけなくて、何でも食べられるようにすることが、そして分量は子ども自身で決めることが出来るものであるから、側からやいゝいはぬ方がよい。動物の母はやいゝいはないであろう。それでゐて子どもは食べ過ぎるといふことはないであろう。人の子の場合でも、そうである。親がやかましくいふから、一寸でも目をゆるすと、やりそこなふのである。始めから子どもの意志によつて、やつてゐるとやり損じないのである。

母は不消化恐怖病からはなれなければならぬ。子どもの虚弱と、母のこの恐怖病との間には関係があることを知つて欲しい。

感 胃 恐 怖 病

おなかを悪くはしないかと、母は絶えず心配するように、風をひきはしないかと、またつねに恐れ

るのである。

七二

どうすれば感冒にかゝらぬかと、合理的に考へて、子どもに着せるのでなしに、唯さむくすると風をひくであろうと思つて、ついでに厚着の習慣をつけてしまうのである。そして却つて皮膚をよはくして、風ひき易いようにしてしまふのである。

うす着をさせる程、肌を冷い空氣にさらさせる機会を多く與へてやる程、皮膚は丈夫になつて、感冒に犯されないようになるのである。

幼稚園の子ども達をみると、どの子どもどの子どもあつ着をしてゐるには驚くのである。どうしてそういふのかといへば、母が感冒恐怖病のとりことなつてゐるためであると、私は答へる。

私は三枚以上は着せない主義である。木綿の肌着と毛のあい着と、その折々の上着と。子どもはこんなことをいふのである。

「三枚きり着てはいけないといはれたから、外で寒い時ははね廻るんだよ、そうするとあつくなるね」
外出する時は三枚の上に外套を着せるのではあるが、家の近くで遊ぶ時は、三枚のまゝ出かけるものだから、子どもがこういふのである。

「それでさ、ね」

と私は答へるのである。

一言に三枚といつても色々である。二枚でも三枚以上のことがあるのはいふまでもなく、三枚でも五枚以上の温かさを保つこともあることは申すまでもない。然し數では三枚主義、そして運動自由自在のように、ゆるやかにしてある方がいゝのである。

「空氣を着せる」

といふことを知つて頂きたい。空氣を多くふくんでゐるような着地のもの、三枚の間に出来る丈多くの空氣をはさんで置くような着せ方。こうすれば寒くないのである。

「着れば着寒い」

といふことがある。寒いと思つてもう一枚もう一枚と、着れば尙ほ寒いように思ふといふのであるが、これは多く着て、着物の間の空氣を減ずるから、寒くなるのである。はねぶとんが温かいのは、はねの間にある空氣が、温を保つてくれるために温かいのである。毛の温かい理由の一つもそうである。

それ故寒くないようにしてやりたいなら、この理をよく知つて、うす着で温かく、而も皮膚を空氣

七三

七四
によくさらすようにすることが大切である。母は先づ、感冒恐怖病のとははれから、解放されねばならぬ。

○
胃腸が丈夫になり、風をひかぬようになれば、それで子どもはすく／＼と成長するのである。愛兒を順調に養教育するためには、母は、知識を求めねばならぬ。先入主となつた間違の常識を矯めねばならぬ。

科學の教へるところを、實行しなければならぬ。

八、結 論

生活の基礎となる健康、知能、品性を十分に練磨してやるためには、母自らが大に學ばねばならぬ。母となる、誠の母となるといふことは、戦つて勝ちえることであつて、そう容易なことではない。私は養教育の眞髓を、その方法に置こうとはしない。母の人格識見に置こうとする。

母にして誠に母であるならば、良い方法は案出されるであろう。人が先である。方法は後である。

これは學校教育に就いても同様である。

自分はどうでもいゝ、子どもを良く育てたいといふなら、それは不成功に終るであろう。教へるが故に教へられる。育てるが故に育てられるといふことは眞であるが、教へるために、育てるために、自ら能動的に學び、自らを育てねばならぬことを、私は根本的なこととして、方法を第一としたい。

母方よ！ 眞に母となられんことを祈る。

昭和六年四月十五日印刷
昭和六年四月二十日發行

定價金參拾錢

著者兼
發行者

星野鐵男

印刷人

金澤市殿町九番地
宇野孝太郎

印刷所

金澤市殿町九番地
活文堂

不許
複製

發行所

金澤醫科大學衛生學教室內

衛生文化思想普及會

振替口座金澤七六五六番

星野鐵男氏著書

衛生文化思想普及會發行

清潔の徹底	<p>身體も精神も環境も社會も清潔でなければなりません。この見地から清潔問題を縦横に論じたものがあります。</p>	八〇錢	送料 六錢
愛兒の爲に何をなすか	<p>愛兒を有つものゝ爲に親切丁寧に書かれた兩親必讀の愛の書です。</p>	一〇〇	八
性教育に就て	<p>性問題がやかましくいはれますが根本的に教育的に書いたものはない中の唯一の書であります。</p>	八〇	六
健康増進に必要な知識	<p>驚くべき不健康状態にある國民の必ず讀むべき文字です。知識は幸福と健康のもと。</p>	三〇	二
顔の話	<p>顔に興味を感じないものはないでせう。人事に關係をもつ者は必讀すべきです。</p>	三五	二
窓の話	<p>窓といふものを科學的に興味深く記述したもの、家に住むものは皆讀んで置く筈。</p>	二〇	二

星野鐵男氏著書

衛生文化思想普及會發行

窓 の 話	顔 の 話	健康増進に必要な知識	性教育に就て	愛兒の爲に何をなすか	清潔の徹底
窓といふものを科学的に興味深く記述したもの。家に住むものは皆読んで置く等。	顔に興味を感じないものはないでせう。人事に關係をもつ者は必讀すべきです。	驚くべき不健康状態にある國民の必ず讀むべき文字です。知識は幸福と健康のもと。	性問題がやかましくいはれますが根本的に教育的に書いたものはない中の唯一の書であります。	愛兒を有つものゝ爲に親切丁寧に書かれた両親必讀の愛の書です。	身體も精神も環境も社會も清潔でなければなりません。この見地から清潔問題を縦横に論じたものがあります。
二〇	三五	三〇	八〇	一〇〇	八〇錢
二	二	二	六	八	送料 六錢

終